名桜大学総合研究，(28)：121-125（2019）

調査・実践報告

済州オルレキルの管理運営形態と支援団体の役割

柳　銀珠*

The form of Operation Management of Jeju Olle Roads and the Roles of Supporting Organizations

Eunju RYU*

要　旨

本研究は，現在，韓国で徒歩旅行としてブームになっている済州オルレキルに着目し，オルレキルの管理運営の現状及び支援団体の役割を明らかにしたものである。研究目的を明らかにするために，本研究と関連する文献調査とオルレキルの管理運営組織である（社）済州オルレの関係者を対象に聞き取り調査を行った。また，実際，オルレキルを歩くプログラムに参加し，オルレキルの実態を把握した。オルレキルは，（社）済州オルレを中心に地域内外の個人や企業，ボランティア団体等の支援によって管理運営されていることが明らかになった。また，（社）済州オルレは，地域ビジネス協力事業，生態復元事業，教育事業等，様々な事業を通して地域貢献や地域経済の活性化に寄与していることがわかった。

キーワード：オルレキル，済州オルレ，管理運営，支援団体，地域活性化

Abstract

Focusing on Jeju Olle roads that are popular for a walking travel now in Korea, the aim of this study is to examine the present state of operation management of Olle roads and the roles of supporting organizations. In order to achieve the study purpose, literature review was conducted and the officials of Jeju Olle Corporation were interviewed. Then the present state of Olle roads was investigated by taking part in the Olle road tour in person.

The study finding revealed that that Olle roads are managed with the support of individuals, enterprises, and volunteer organizations inside and outside the region, led by Jeju Olle Corporation. Moreover, Jeju Olle is making a contribution to local contribution and revitalization by developing a variety of local business collaboration, ecological restoration, and educational projects.

Keywords: Olle roads, Jeju Olle, operation management, supporting organizations, regional vitalization

* 名桜大学国際学群観光産業教育研究学系　〒905-8585　沖縄県名護市為又1220-1　Meio University Faculty of International studies, Department of Tourism Industry, 1220-1, Biimata, Nago City, Okinawa, Japan 905-8585

１．はじめに

近年,健康をテーマにした観光,すなわち「ヘルスツーリズム」が注目され，行き先となる地域活性化も大いに期待されている（羽生，2011)。ヘルスツーリズムの中でも，韓国で新たな観光形態として注目されているのが徒歩旅行である。徒歩旅行は，健康や癒しのための旅行として人気を集め，韓国の多くの自治体が徒歩ルートを開発している。韓国の徒歩旅行は，1,689コースと独自の名前をもつ道が595個ある。その総距離は，17,671Kmに達している。徒歩旅行の造成事業は，文化体育観光部や安全行政部，環境部，国土交通部，海洋水産部，山林庁が関与しており，これらの中央行政機関が自治体を支援し，造成した徒歩旅行は，390個，総距離が10,246Kmである（文化体育観光部，2013)。

このように，韓国では多くの徒歩旅行コースが開発されている。特に，本格的に韓国で徒歩旅行ブームになったきっかけは，済州島のオルレキルが開発されてからである。オルレキルは，2007年９月第１コースが開発されてから訪問者が多く増加し，2011年には年間100万人を超える人々が訪れた。オルレキルは,他の徒歩旅行と違って民間が開発した道であり，政府の補助金に依存せず，社団法人済州オルレという非営利団体を中心に，オルレキルを支援する様々な団体によって，管理運営されている。政府や行政の財政的な支援なく，どのようにオルレキルを開発し，管理運営されているのかを知ることは，今後，徒歩旅行の道を開発する際に，重要な示唆を与えると考えられる。

そのため，本研究では，済州オルレキルの管理運営形態の現状を把握するとともに、どのような支援団体が関わっているのか、その役割とは何かについて明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

本研究では，本研究と関連する資料収集，文献調査を行った。また，現地調査を２回実施した。１回目は，オルレキルの管理運営の現状を知るために，（社）済州オルレの関係者を対象に聞き取り調査を行った。聞き取り調査は，事務局長と企画運営室の職員を対象に約３時間行われた。調査は2016年11月２日である。

２回目は,オルレキルについてより深く理解するため，2018年３月14日～15日にフィールドワークを行った。14日は実際,「アカジャボンと一緒に歩く」のプログラム(14－１コース）に参加し，オルレキルの実態を把握した。

３．オルレキルの概要

オルレキルは，2006年（社）済州オルレの理事長がスペインのサンチアゴの巡礼の道を歩いたことにヒントを得て作られた道であると言われている。理事長である徐明淑（ソ・ミョンスク）氏が済州オルレの創設者で，最初にオルレキルの開発と整備，組織づくりを始めた人である。オルレは，済州島の言葉で「通りから家に通じる狭い路地」，キルは「道」という意味である。

オルレキルは，済州島を一周できるウォーキングコースであり，2007年９月に最初のコースができ，現在は26コースが開発されている（表１参照)。オルレコースは，表１で示されているように，コースごとに総距離や所要時間が異なっており，歩く時間は１～２時間の短いコースもあれば，６～８時間かかるコースもある。コースの全体の総距離は425Kmである。

表１　オルレキルのコース概要

コース	コース名	総距離(Km)	所用時間(h)
1	始興－クァンチギオルレ	15.1	４～5
1－1	牛島オルレ	11.3	４～5
2	クァンチギ－温平オルレ	14.7	４～5
3	温平－表善オルレ	A-20.9 B-14.6	A-6～7 B-4～5
4	表善－南元オルレ	19	5～6
5	南元－牛沼端オルレ	13.4	４～5
6	牛沼端－西帰浦オルレ	11.6	3～4
7	西帰浦－月平オルレ	17.6	5～6
7－1	ワールドカップ競技場－西帰浦オルレ	15	４～5
8	月平－大坪オルレ	19.5	5～6
9	大坪－和順オルレ	7.6	3～4
10	和順－摹瑟浦オルレ	17.5	5～6
10－1	加波島オルレ	4.2	1～2
11	摹瑟浦－武陵オルレ	17.3	5～6
12	武陵－龍水オルレ	17.5	5～6
13	龍水－楮旨オルレ	15.2	４～5
14	楮旨－翰林	19.1	6～7
14－1	楮旨－西広オルレ	9.2	3～4
15	翰林－高内オルレ	A-16.5 B-13.5	A-5～6 B-4～5
16	高内－光令オルレ	15.8	5～6
17	光令－済州元都心	18.1	6～7
18	済州元都心－朝天	19.7	6～7
18－1	楸子島オルレ	18.2	6～8
19	朝天－金寧オルレ	19.4	6～7
20	金寧－下道オルレ	17.6	5～6
21	下道－終達オルレ	10.8	3～4

出所：済州オルレガイドブック（2017）より筆者作成

オルレキルは，車いす区間があるコース（1，4，5，6，8，10，10-1，12，14，17コース）もあり，体が不自由な人でも利用できるようになっている。

オルレキルを歩く参加者は，自由にコースを選択することができ，コースごとに済州特有の自然や文化，歴史等に触れることができる。済州観光公社（2010）の調査報告書によると，オルレキルの魅力は，済州の自然，文化，歴史を味わうことだけではなく，健康増進，精神的な安定が得られること等が言及されている。

このように，オルレキルは参加者にとって身体的，精神的な健康回復ができるものとして認識されている。

4．オルレキルの開発による地域活性化

オルレキルは，韓国の徒歩旅行の中でも成功事例として取り上げられており，多くの観光客が訪れている。オルレキルの訪問者数をみると，最初のコースができた2007年には，年間3千人であったが，1年後にはその10倍である約3万人が，2011年には100万人を超える人がオルレキルを訪問した。近年は，済州島のインフルエンザや口蹄疫の流行，台風等によって運営しない時もあり，少し減少した時期もある。また，コース別の訪問者数をみると，7コースが7万925人で最も多い（2018年度基準）[1)]。7コースは，「済州オルレ旅行者センター」からコースが始まり，海岸沿いを散策し，済州の自然を感じることができ，利用客から人気が高いコースである。

さらに，オルレキルは，地域住民が運営する食堂や市場を通ることになっており，市場の利益は，毎年30％以上増加している。また，オルレキルが開発されたことによって，新たな食堂や宿泊施設も増え，雇用創出と地域活性化に寄与している[2)]。

5．オルレキルの管理運営と支援事業[3)]

オルレキルは，（社）済州オルレが中心となってコースの開発や管理運営が行われている。済州オルレは，オルレクン（済州オルレを利用し，愛する人）からの個人後援，企業からの後援，独自のブランド商品の収入，ゲストハウスやカフェ運営等の収入で管理運営されている。個人後援は，定期後援と一時後援があり，900人の定期後援者がいる（2014年4月基準）。企業は，法人会員が70社（企業会員44社，特別後援事業者12社，友達企業14社）ある（小笠原・中嶋，2015）。

後援した個人や企業の名前は＜写真1＞のように済州オルレ旅行者センターの壁に書かれている。後援金は，済州オルレコースの維持管理，（社）済州オルレの運営，案内標識のカンセとリボンの再設置等に使用される。

一方，（社）済州オルレは地域ビジネス協力事業を推進している。その事業の一つが「1社1オルレ」であり，これは企業と地域が協力し，地域ビジネスの創出を目指すものである。「1社1オルレ」の代表的な事例として「ムルンファーム」が挙げられる。これは会員制農産物宅配サービスで，地域と企業が協力して事業を推進している。

また，済州オルレの記念品である「カンセ人形」を作る工房組合を運営，支援している。

写真1　後援者の名前
出所：筆者撮影（2016年11月2日）

写真2　記念品として販売されているカンセ人形
出所：筆者撮影（2018年3月15日）

さらに，オルレキルの生態復元事業やオルレコースの清掃活動を推進する「クリーンオルレ」を実施し，環境保全活動にも取り組んでいる。クリーンオルレは自発的に参加するもので，参加者は記念品とボランティア活動の確認証を取得することができる。

この他にも，済州の自然や文化，歴史等を教育する「済州オルレアカデミー」の運営，村の地域資源の広報事業，「済州オルレウォーキングフェスティバル」の開催等，様々な事業を推進している。

6．地域内外のボランティア団体からの支援

オルレキルの管理とプログラムの運営には，ボランティア団体も大きく貢献している。ボランティア団体は，①アカデミー総同窓会，②オルレジギ（オルレを守る人），③ベレギカンセ，④オルレコースの完走者クラブがある。

まず，アカデミー総同窓会は，済州オルレアカデミーを終了した約2,000名の同窓会に所属している人々がコースを管理している。また，オルレキルを一緒に歩くプログラムである「アカジャボンと一緒に歩く」等を運営している。ここでアカジャボンは，アカデミーとボランティアを合わせた韓国語の合成語である。アカジャボンは強制的ではなく，あるコースを歩きたいときに，人を募集し，一緒に歩く形態である。オルレコースの中には，道がわかりにくく，一人で歩けない人もいるので，アカジャボンと一緒だと不便なく歩くことができる。

オルレジギは，オルレコースを維持保守する活動を行っている。オルレキルは，自然が多く草が伸びたり，道の標識であるカンセ[4]とリボン[5]が壊れたり，落ちたりする。オルレジギは月２～３回，担当するコースを歩きながら維持保守の作業を自発的に行っている。

写真３　カンセ（上）とリボン（下）の標識

写真４　アカジャボンのリボンの保守作業の様子
出所：筆者撮影（2018年３月15日）

ベレギカンセは，済州の方言で「変わった子」を意味する「ベレギトン」から名付けられた2030青年のボランティアグループである。このグループは，済州オルレウォーキングフェスティバルの時にオルレを歩く人々とコミュニケーションをとったり，第４週目に開催される「済州オルレ一緒に歩こう」を主管している。

完走者クラブは，26コースを全部歩き終えた人々の集まりで，済州オルレ旅行情報を共有し，主要行事があった際に行事が円滑に進められるように協力する。完走者クラブは，聞き取り調査によると，１回だけではなく，何回も完走した人もいるという。

これらの団体は済州に住んでいる地域住民もいれば，他の地域から参加する人々もいる。

このように，オルレキルは，地域内外のボランティア団体から支えられ，これらの団体がオルレコースの維持管理に大きく関わっているといえる。

7．おわりに

本研究では，済州オルレキルの管理運営形態とオルレキルを支援する団体の役割について明らかにした。オルレキルは，（社）済州オルレの理事長が非営利団体である済州オルレを設立し，本格的に開発された。（社）済州オルレは，オルレコースの開発，管理，運営のみならず，地域団体や地元住民を支援する様々な事業を推進していた。また，地域ビジネスを創出する事業や環境保全活動にも取り組んでいることがわかった。

さらに，オルレキルは，地域内外のオルレキルを愛する個人や企業，ボランティア団体等から支援を受け，管理運営されていることが明らかになった。このように，オルレキルは，地域の内部だけではなく，外部の人々や企業から支えられ，地域内外の連携によって地域経済の活性化を図っていることがわかった。また，オルレキル

を愛し，利用する人々，支援してくれる人々の存在がいるからこそ，持続可能な観光につながると考えられる。

今後の研究課題としては，地域住民や地域コミュニティがオルレキルの開発，管理運営にどのように関わっているのかをより具体的に考察する。また，オルレのコースごとに地域資源がどのように活かされているのかを明らかにしていきたい。

（注）

1）オルレキルの訪問者数は，（社）済州オルレが提供する『済州オルレ月別利用客の現状』（2007年－2018年）を参照した。
2）内容は（社）済州オルレの内部資料を参照に作成した。
3）内容は文献，資料，聞き取り調査に基づいて作成した。
4）カンセは済州オルレの象徴となっているチョランマル（済州島固有の小型の馬）の名前である。とうもろこしを原料にした環境にやさしい素材で作られている。オルレコースの分かれ道は，カンセが道を案内し，カンセの頭が向いた方向が道の進行方向である。
5）リボンは済州の海を象徴する青色と済州のみかんをイメージするオレンジ色がある。青リボンは正方向を，オレンジリボンは逆方向を示す。矢印を描きにくい山道等で使用されている。

【謝辞】

本研究を作成するにあたり，調査にご協力していただいた方々に心より感謝申し上げます。

【付記】

本研究は2016年度名桜大学総合研究所の新規採用者助成を受けて作成したものである。研究成果の一部は，2018年の６月に開催された“20th International Conference on IT Applications and Management”で発表され，本稿はその後追加調査，研究を行い、執筆したものである。

参考文献

文化体育観光部（2013）：全国に造成された徒歩旅行，体系的に管理推進（報道資料）．（https://www.mcst.go.kr/web/s_notice/press/pressView.jsp?pSeq=12854）2018年９月25日閲覧

羽生正宗（2011）：観光立国推進戦略 ヘルスツーリズム概論．日本評論社，p.17.

済州観光公社（2010）：済州オルレキル利用客実態調査報告書.

済州オルレのホームページ（http://old.jejuolle.org/?mid=40&act=view&cs_no=10#）

小笠原正志・中嶋 健（2015）：民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイルー「済州オルレ」徒歩旅行ブームの実態，スポーツ産業学研究,25（１），pp.61-73.

社団法人済州オルレ（2017）：済州オルレガイドブック.

Jeju Olle Association, Inc. Data Center, Monthly average number of visitors to Jeju Olle Roads, 2007-2018. Accessed on 22.09.2018.

Park, Y. and Hyun, Y, “An exploratory study of walking-tour motivation: The case of Je-Ju Island Ol-Legil,” *Research on Tourism*, Vol.33, No.7 2009, pp.75-93.

Shin, D. and Choi, Y, “Analysis of the Effect of Jeju Olle and Tasks for Development,” Jeju Research Institute, 2017.